

平成 30 年度 第 2 回富田林市市民公益活動と協働のための市民会議録

実施日：平成 31 年 2 月 6 日（水）

場 所：市役所 401 会議室

時 間：18：00～20：00

出席者：市民会議委員 7 名

傍聴者：0 名

事務局： 次第 1 「Mira-ton（みらとん）2018→19 について」説明

※Mira-ton（みらとん）は、「未来の富田林を考えるための会議」の愛称で、市民と行政が、ともに考え、動いていくために、さまざまな年代や地域の皆さんと一緒に取り組みを話し合うことを目的としています。

寺田委員： みらとんで作成した動画は、富田林を舞台に若い男女がデートをするというコンセプトで撮影し、脚本や編集などを大阪大谷大学の学生などグループみんなで分担し作成しました。このグループの作品が最高得票を得られ、このチームが一番面白いものを作ったという評価でした。

みらとんをきっかけに、参加者が地域に出て行って富田林市を知ってもらえたという点と、色々な活動に参加していただけたというのが大きな成果でした。私は、3 年前に始まったみらとんに毎年参加しているが、若者の参加が少ないと感じています。最初の応募の段階から若者が少なく、3 回目の実践編になると大学生 1 人の参加となってしまった。

全 5 回のみらとん終了後に行ったアンケート結果を見たら、非常に満足度が高く、20 人中 19 人が次回も参加すると回答していた。

久議長： 若者にどうやったらみらとんの存在が届くかということが課題とのことですが、何かご意見はありますか。

谷川委員： みらとんを開催するにあたり、若者を募集したということですが、私の周りの人はみらとんの存在を知らない人がたくさんいて、Topic でも「みらとんってなに？」という感じです。具体的にどのように募集されたのですか。

寺田委員： みらとんの参加者募集は、無作為抽出した 1,000 人に案内を送付したり、市の広報誌やウェブサイトでの募集だったので、若者に的を絞った PR はできていません。また、富田林市と連携している、大阪大谷大学、大阪芸術大学、阪南大学にも声をかけたが、大阪大谷大学からしか参加がなかった。若者に的を絞った PR ができていないことが、ネックになっていると思う。

久議長： 公募枠の募集もあるのではないですか。

寺田委員： 広報誌やウェブサイトなどで公募枠の募集も行っていますが、若者が広報誌やウェブサイトを見ているかということもあるので、SNS 等を使った PR が必要になってくると思います。

久議長： 若者の参加が少ないのが課題という前に、積極的に PR ができていないと思います。公募の人数を 5 人と限定してしまうと、最大でも若者の参加は 5 人なので、若者の参加をもっと募るのであれば、若者を重点的に PR することが大事です。〇〇市では、30 代 40 代を中心に面白い社会実験をしているので、紹介させていただきます。今、市民会館の建て替えを検討していて、市民会館の前にできる広場をどういうふうに住居できるかという事を考えています。ワークショップを繰り返しながら、やろうという人たちを中心に、実行委員会的に集まり、その人たちの口コミで取り組みを広げていっています。その活動には、図書館の若手職員が企画した、図書館の本をワゴンに乗せて持ってきて、芝生に寝転がりながら本を読んだり、キッチンカーの屋台が出店されるのでご飯を食べながら本を読むという試み。地元でとれたお米を使ったおむすびや、野菜を使った味噌汁を作って、それをみんなで食べましょうというイベント。ひと箱サイズの箱に、小さな服を置いてフリーマーケットをするイベント。寄せ植えをして、広場を花で飾ろうというイベント。また、こたつでコミュニケーションといって、こたつをみんなで五台自作し、そこに座って語りあおうという楽しいイベントなどを、思いついた人が中心になって、その人のネットワークで動かしていっています。楽しいことをやれば、若い人たちもたくさん集まってくれるという感じがとても分かります。

西尾委員： 私はみらとんに参加したことがないが、富田林市の人口は、平成 19 年から 10 年間で約 1 万人減っていて、人口流出が特に激しいのが 35 歳から 45 歳の年齢です。若者の増加も必要だが、40 代 50 代の人々が住んで良かったなと思えるまちにしていけないといけないと思います。また、富田林市の郊外には、農業公園サバーファームやスポーツ公園などの施設がありますが、そこに行くのにバスが全然なく、交通が不便な状況です。逆に富田林市の中心部にはエコールロゼ（商業施設）があり、その北側に広い公園があるが、全く利用されていません。その公園は、樹木がたくさん生い茂り密林みたいになっていて、誰も行かない。その公園の樹木を伐採し、久議長から説明のあった、なだらかな丘のある芝生広場のある公園にすれば、小さな子どもをかかえているお母さん達が集まってくると思います。樹木を伐採するのに費用はかかるが、樹木を伐採して芝生広場にすするほうが、より有効な利用活用ではないかかと考えています。

久議長： 〇〇市では、提案型の協働事業があり、その事業を活用して市内 2 ケ所の公園を市

民の団体が、手入れしています。市役所の公園課がするのではなく、手をあげた市民団体を市役所が応援するという形をとっています。また〇〇市では、里山管理をしているグループが、入山する前のトレーニングとして、学校の校庭や公園の林を管理している例もあるので、そういった活動とうまく組み合わせれば、より協働事業をすすめられるのではと思います。

緒方委員： 私は、金剛地区まちづくりの再生に取り組んでいますが、国で公園の活用方法が見直されたことから、公園を拠点とした地域コミュニティの再生を目指すことを提案しています。新しい取り組みの中で、民間企業に協力してもらえるところがあれば、アイデアと資金を投入してもらいながら、コミュニティ再生づくりをやっていこうという取り組みがあります。去年、一昨年統計を見ると、富田林市の人口流出は、府下の市制都市では河内長野市の次に人口流出が高く、このままでいくと消滅都市になってしまいます。総合基本計画等の計画の中で、そこにスポットをあてた取り組みをしなければ持続的にまちが元気になっていくということは難しいと思います。

丹下委員： ワークショップなどに参加する時には、内容が分からないと参加しにくいし、案内が届いても行ってみようかなとなかなか思えない。過去に開催した事業についてのお知らせをするのであれば、過去の開催内容が分かるような案内を出したら、参加しやすくなると思います。

久議長： 告知だけでは内容はなかなか伝わらないので、「去年こういう人たちがこういう事をした。」とお知らせする方が、「それだったら行きたい。」というようにつながっていくと思うので、周知方法についてもよく考えた方がいいと思います。

岡室副議長： 今年度、大阪大谷大学でも、みらとんの参加募集の案内が届いてから、教員が学生に声をかけて推薦しました。みらとんに参加したら、まちづくりについての勉強になりますよ、他大学の学生と交流できますよ、サークル活動的なこともしますよとアピールすることも、大切なのかなと思いました。

谷川委員： せっかく、若者が集まっている Topic で開催しているのだから、Topic に来ている学生たちとコラボして開催するように工夫すれば、子どもたちもうまく参加できるのではないかなと思います。例えば、「富田林名物の寺内町のコロツケを食べよう。」など、イベント的にからめていけば若者の参加にもつながっていくのではないかと考えています。

久議長： みらとんの参加の呼びかけ方が、公募枠を 5 人に限定するなど、少し硬いように感じます。先ほど谷川委員の意見にもあったように、友だちがいたら、途中からでもどンドン参加したらいいよとか臨機応変に参加できる方がいいと思います。そうすれば、

若者の参加も増えると思います。

寺田委員： みらとんの事業を行っている政策推進課と、会場の Topic を管理している生涯学習課が、横断的に連携していないのも課題の一つだと思います。Topic を会場にするのであれば、生涯学習課も一緒に考えて、Topic を使っている人をターゲットにして、その場所の利点を活かすべきだと思います。また、個人的な意見ですが、例えば、もっと大学と協力して、ワークショップを作るところから学生と協力して開催すれば面白いのではないかとも思います。そうすることによって、大学生の参加もより促せると思います。

岡室副議長： 以前、学生にみらとんに参加するのは、ハードルが高いと聞いたことがあります。理由は、富田林市のまちづくりについて話し合う基礎知識として、寺内町や富田林市の名所などの知識がない。だから、会議の前に、富田林市はこういうまちですよというような事を知ってもらえる機会を設定して、参加してもらうようにしたらいいかもしれません。

寺田委員： 学生が参加しやすいように富田林市のことを知ってもらう機会も必要だと思うが、ただ学生にそこを求めなくてもいいのかなとも思います。富田林市についての知識を出してもらうよりも、富田林市の知識を持っていない若者として、どう考えているかという意見も出してもらえるとと思います。

久議長： ここは協働のための市民会議なので、協働という観点からみらとんをどうするかということであれば、寺田委員が言われたように、市役所内の連携がうまくいけば、みらとんにも良い効果が出てくるのではないかなとも思います。また、〇〇市では、職員同志のいい関係ができており、そういう関係や雰囲気が続けられれば、自然と横断的なつながりができ、市民との協働にも影響をあたえてくると思います。

事務局： 今までは、政策推進課が主管課としてみらとんを開催してきましたが、平成 31 年度からは、政策推進課から市民協働課にこの事業が移管されることになりました。今日いただいた意見をすべて受け入れられるか分かりませんが、もっとより良いものにしていきたいと考えています。

事務局： 次第 2「校区単位のまちづくり協議会について」説明

久議長： 次第 3「宝塚市における協働のまちづくりの取り組みについて」説明

久議長： 宝塚市ではまちづくり協議会がどうなっているかということについて情報提供させていただきます。宝塚市では、現在 20 のまちづくり協議会が活動していて、20 年以上経

過していますが、うまく運営ができていないところが半分ぐらいあります。

宝塚市のまちづくり協議会でいうと、自治会はまちづくり協議会の構成員あるいは運営の核になるのは当然です。しかし自治会だけでなく、地域の中にある福祉委員会や子ども会やPTAなどの様々な団体が横につながり、連携するというのがまちづくり協議会の一番の重要なポイントです。それぞれの組織構成員の体力も弱ってきているというのもあり、一組織で活動するよりも連携した方がうまくいくのではないかという流れもあって、まちづくり協議会が全国各地で動いています。さらに、「アナタもワタシも「まち協」の一員です。」とあるように、構成員はすべての住民となっています。すべての住民の意味には二つあって、自治会は加入された会員で構成されています。自治会に加入されていない人は、基本的には自治会の活動に参加できない。しかし、まちづくり協議会はすべての住民が会員なので、加入しているかしていないかは関係がありません。そこに、住んでいる限りは、構成員になれます。二つ目の話は、自治会はどちらかというと、世帯単位で動いています。自治会の会議を開催しても、世帯から一人出てきます。まちづくり協議会の構成員は、すべての住民ということになるので、家族のすべての人の意見が反映されます。

そのまちづくり協議会をうまく進められないかという事で、協働のまちづくり促進委員会でガイドラインを作成しました。また、作成したガイドラインには、協働の姿勢を示すためにまちづくり促進委員会の名前が入っています。これは逆にみると、委員会も責任を持つ、自分たちも作ったということ責任を持ちましょうということで名前が入っています。そして、協働まちづくり促進委員会のメンバーみんなでチェックリストを作成しました。その中の最初の項目は、地域住民の方でこんなことやりたいと思っている方がいた時に、まちづくり協議会にその事を申し出る機会や場面があるのかという項目です。やりたい方をやるようにするためには、手が挙げられる場所、機会があつてしかるべきだろうというのが最初の項目です。次の項目は、地域の多くの人たちに意見を聞いていますかということです。幅広い年代の人から意見収集するために、ワークショップや住民アンケートなどで意見を収集していますか。つねにここで住んでおられる方の想いを収集しながら活動展開できていますかという項目になっています。

現在のまちづくり協議会の状況が、うまくみんなの声を聴きながら進められる地域もある一方で、まだまだ一部の役員が決めてしまうというところがあるので、現状では変えるのが難しくても、これをきっかけに数年かけてみんなで物事を決めて動かせるまちづくり協議会にしていきたいという事にしています。一部の役員さんで計画づくりをしていると、地域の状況についてはよくご存じかもしれないけれども、それぞれの住民の想いは見えていません。まちの状態は、いろいろなデータやまち歩きすれば分かるけれども、それぞれの方の想いというのは語り合わないといけない。そこを分かり合うためには、ワークショップをやっていただくというのが重要です。みんなが声をあげられて、その声が反映できる実感を持てれば、もっと会議など参加の度合いが変わってくるはずで、なぜ参加が少ないのかというと、どうせそうなること

に決まっている、私が言っても変わらないというような、諦めみたいなものが住民に出てきているのではないかなと思います。そこをなんとかまちづくり協議会を動かす団体で変えていくきっかけになればという事で、宝塚市のまちづくり協議会のガイドラインを作成しました。まちづくり促進会というのはまちづくり協議会の会長、会長経験者、自治会の会長、自治会の会長経験者が半数入っているので、現場の声を反映しながらこういう形で進めようとしているという事も情報提供しておきます。

西尾委員： 現在地域福祉課と社会福祉協議会が取り組んでいる校区交流会議と今回のまちづくり協議会との関連はどうなっていますか。

事務局： 総務省が提案している、それぞれの地域で自治を行う小規模多機能自治がまちづくり協議会なのかと考えていますが、富田林市はまだまだそこまでいけていない状況です。今後、西尾委員の意見にもあった校区交流会議、すこやかネット、校区福祉委員会などの団体とも連携しながら、一つの小学校校区ごとの協議会を作っていきたいというのが理想です。

丹下委員： 校区交流会議につきましては小学校区を単位にして、自分たちの校区が今後どのようなになったらいいかなという事をテーマにしてワークショップを開催してきました。現在は、地域によって温度差はありますが、ワークショップで出た意見を実現できるように、少しずつですが、みんなで考えながら活動を始めているところで

久議長： 今、〇〇市のニュータウンで、空き家対策のワークショップを開催しました。その時に、私は住宅政策課に「住宅政策課は、空き家対策しか目に見えていない。地域の方はそうではなくて、まちに暮らし続けるという観点も持っているから、ワークショップを空き家の事だけでなく、いろいろな話題も出せて自分たちでできることができるようなワークショップをしませんか。」とお願いしました。そして、市役所の方も地域福祉の担当とか、さまざまな担当が一緒に入ろうということにした。主催は誰であろうと、その時どういうチームで入れるかということが重要だよという話になりました。富田林市では、先ほどの校区交流会議というネットワークを持っているので、そこに市役所のさまざまな部署の職員が入っていくのがいいと思います。逆に担当ごとにワークショップを開催すると、地域の住民さんからは、「担当ごとにワークショップをさせられて、何度も同じことを言わないといけない。」という話になるので、それを避けるためにも「地域に入るときはみんなで入ろうよ。」という体制づくりもした方がいいと思います。

緒方委員： 先ほどの校区交流会議ですが、私も一度参加しましたが、まちづくり会議と全く同じような内容をしていました。また、高齢介護課の生活支援等サービス体制整備協議体のメンバーに生活コーディネータとしても参加していますが、高齢者の生活支援、

高齢者の助け合い支えあいを求められています。できるだけ在宅通院で医療介護費を軽減していこうという目的で、地域コミュニティの高齢者の助け合いや支えあいを進めましょうというのは絶対無理があると思っています。また、久議長が言われたように、いろいろな会議で同じようなことやっていて、住民は行ったところで同じことを何回も何回も言っている状況では、地域コミュニティは再生できないと思います。まちづくり協議会においては、行政も横の連携で一つとなって、地域と連携していただくという事が重要だと思いますのでよろしくお願いします。

久議長： 私もまちづくり協議会で地域が一本化する前に、市役所の地域担当の窓口を一本化にしてくださいと思っています。鏡のような物なので、市役所が一本化になったら地域も一本化になると思っていますので、そこは検討してください。今〇〇市で調べているのが「各担当課が、地域のどなたをパートナーにしているのか。」ということです。かなりバラバラで、福祉委員会が窓口になっている、自治会が窓口になっている、まちづくり協議会が窓口になっています。そこをまず整理して、すべての課がまちづくり協議会を一本の窓口になれば、地域もスッキリすると思います。行政の縦割りがそのまま地域団体の縦割りにつながっていると思いますので、そこを何とかしていただきたい。将来的には、現在さまざまな団体にそれぞれ交付している補助金を一本化できたらいいかなと思っています。寄せ集めると、だいたい一千万円ぐらいの補助金を一つの地域に交付しています。将来的には、その一千万円をまちづくり協議会に交付し、どの団体のどの活動にどう使うかというのを地域で自在に決められるようになっていいなあと思っています。一千万円のお金を動かそうと思ったら、透明性のある意思決定と会計をやらなくてはいけないので、ある意味地域にもしっかりとやっていただく責任が発生すると思います。

緒方委員： 宝塚市で取り組んでいるまちづくり協議会は小学校単位で運営されていると思うのですが、実際に運営する事務局はどういう形になっていて、どういう人が担っていますか。

久議長： それは地域によっても違いますが、各団体から1名ずつ事務局に送り込んでいただいているのが一番わかりやすいですが、まちづくり協議会自体に事務局長やスタッフがいる地域もあり、それぞれの協議会でさまざまな作り方をしているという感じです。〇〇市もコミュニティ協議会というのが、各小学校区であるのですが、その一つのコミュニティ協議会の役員の決め方が面白くて、役員さんを決めるための推薦委員会をたちあげて、その推薦委員の方々が「この人が会長になってほしい、この人が副会長になってほしい。」という事で推薦をして、その方をお願いして了承が得られれば、総会で決議をして会長、副課長、会計、書記を決めていきます。推薦委員会のメンバーは役員にはならないという、二段構えにしているというのが面白いと思います。

事務局：       さまざまなお意見ありがとうございます。今後は、市民協働に向けた市政の横断的な窓口ができるように働きかけをしていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

久議長：       私がいつも話しているのは、全員参加という事自体が、ちょっと元気な人にとってもそっぽ向かれていますのではという感じになっているのではないかと思います。例えば宝塚市の協働の指針の説明会の時に、〇〇保育園長に、校庭の遊具なんかも全部保護者の方に作ってもらっていて、協働で園庭整備などが行われているという事の事例報告をしていただいた。〇〇保育園長に「たくさんの保護者の方がいる中で、積極的にかかわってくださる方はどれぐらいの割合ですか。」とお聞きしたら、〇〇保育園長がおっしゃるのは「1割いるかいないかです。」と話されました。あとの9割の方はなかなか腰を上げてくださらないが、その1割の方をしっかりとパートナーとして見つけて、あれをやろう、これをやろうという事でみんなやっているという話をしていました。呼びかけをして、それに応じてくれる方は1割、2割だと思います。そういう方々をしっかりとつないでいくことが、うまくいくという事だと思います。その時に、1割、2割の方は自分の意志で動いているにもかかわらず、これが数年続いてくると、私たちばかり動いてという文句に代わってくる。そうになってしまうとうまくいかなくなります。自分自身で動いているという方は、常に自分の意志で動いてくださるような雰囲気づくりを継続していけば、元気な方々というのは一定数いると思うので、そこにどうやって触手伸ばせるかというところがポイントだと思います。そこがまちづくり協議会の運営で非常に重要なところで、地域福祉は楽しくてやっているのではないと思う。しっかりとやらなくてはいけない部分があると思う。しっかりとやらなくてはいけない部分は今までの組織でしっかりとやっていただかないといけないが、一方でやりたい方、やる方が楽しくやりたいという事もある。その受け皿が今までの組織団体では作りえなかったのではないか。しっかりとやるべきことと楽しくやるというのがうまく組み合わさっていけてまちづくり協議会はどちらかという楽しんでやれる部分をつくっていけたらうまくいくのではないかと思います。

もう一つ具体例を挙げますと、最近若い方はハロウィンパーティーを自分たちで企画して楽しくやる、地域の地蔵盆もハロウィンパーティーと一緒に子どもたちにお菓子をあげるイベントですから、地蔵盆とハロウィンパーティー何が違うのか、自治会の方にいうと、おそらくどうしてハロウィンパーティーは若い人が積極的に動いて地蔵盆は動かないのか。地蔵盆は歴史伝統があるのでやるべきことが決まっている。そこに自分たちの創意工夫をはさむ余地はなかなかない。その面白くないという感覚があるので地蔵盆の実行委員会には若い方が来てくれない。一方でハロウィンは新しい祭りなので自分たちで自由に企画運営できる。そういうようなタイプの活動を地域活動で増やしていくことによって、おそらく若い方もどんどん増えていくのではないかというふうに思っています。

全員に入ってもらおうというのは無理があると思うが、やりたいという方は一定数お



られると思うので、やりたいと思っておられる方に担っていただけるような期待作りをまちづくり協議会を立ち上げたあかつきにはうまくやっていただけたらと思います。